

# 南九州貝殻文系土器の組合せに関する覚え書き

黒川 忠 広

A Memorandum about an Assortment of Potteries  
with Shell-impressed Decorations in South Kyushu

Kurokawa Tadahiro

## 要旨

南九州貝殻文系土器は、南九州の縄文時代早期前半を代表する土器群で、近年の発掘調査によって多くの資料が蓄積されている。この土器群には、円筒形・角筒形・レモン形という三つの器形が存在し、型式学的連続性やその分布状況などから南九州の独自性を示すものと考えられる。しかし、多くの資料は円筒形か角筒形に分類しなくてはならない状況が長く続き、レモン形に関して具体的に論究されることはなかった。小稿においては、この中でもレモン形を中心に三者の関係をより具体的にするため、南九州貝殻文系土器の組み合わせに関して自分なりに研究の方向性を確認する上で覚え書きを記したものである。

キーワード：南九州貝殻文系土器、円筒形・角筒形・レモン形、平口縁と波状口縁

## 1 はじめに

南九州貝殻文系土器は、南九州の縄文時代早期前半を代表する土器群で、近年の発掘調査によって多くの資料が蓄積されている。この土器群には、円筒形と角筒形という2種類の器形が存在し、両者は伴関係にあることが型式設定時から述べられている（河口 1955）。高度経済成長に伴い、大規模開発とそれに伴う大規模な埋蔵文化財発掘調査が始まると、資料の蓄積や研究の深化はより著しいものとなった。また、アカホヤ火山灰層の発見によって従来の編年観が大幅に修正されたのである（新東 1980）。今回のテーマである南九州貝殻文系土器の組み合わせに関しても、新資料の発見があった。すなわち、口縁部上面観がレモン形を呈する土器（以下レモン形と省略）の発見である。

いわゆるレモン形が初めて資料化されたのは、鹿児島市加栗山遺跡である。この後、栗野町山崎B遺跡や金峰町宇治野原遺跡等においても確認されてきた。だが、資料としての判断はある程度接合が進んで全体の様相が判明しない限り、円筒形であるか角筒形であるのか、あるいはレモン形であるのか判別が困難であり、多くの資料は円筒形か角筒形に分類しなくてはならない状況が長く続き、このレモン形に関しては具体的に論究されることはなかった。

この状況の中、筆者等は加栗山遺跡の資料について報告書刊行後に新たに接合したことで全体の様相が判明したものを中心に資料紹介をおこない、レモン形を呈する資料の位置付けについて述べたことがある（黒川・桑波田 2000）。

小稿では、このレモン形を中心に南九州貝殻文系土器の各土器型式の組合せに関して、論究を進めるに当たっての覚え書きを記したものである。<sup>1)</sup>

## 2 レモン形とは

レモン形とは、その名が示すとおり口縁部もしくは底部の形状が果物のレモンのように見える土器のことである。俗的に用いたものであり、口縁部に2カ所の角頂部がほぼ対角線上に形成されるものである。レモン形が見られる南九州貝殻文系土器の各土器型式ともに底部に至るまでレモン形を呈するものが多いが、前平式土器段階のものには胴部上半で円筒形化しているものもある。口縁部に角部を形成する点から、広義の角筒形に属するものと思われる。

文様は、レモン形のみ特徴的な手法が採られているわけではなく、セット関係にあるとされる円筒形若しくは角筒形と同一の施文である。

内面調整は、各土器型式の特徴をそれぞれ有している。例えば、加栗山式土器の口縁部内面にはミガキ手法が明瞭であるが、前平式土器のそれには見られない。角部周辺の調整は角筒形と類似し、角部には縦位の調整が、角部周辺では角部へ向かうように下から上へと調整が施されている。

現段階で不明な点は、その初現である。角筒形の発生と同じくレモン形も発生しているのか、それ以前若しくはそれ以後なのか、前平式土器がこれまで以上にまとまって出土する遺跡の発見を待たなくてはならない。

第1図と第1表は、現在筆者が知り得た限りでのレモン形を呈する土器の出土遺跡の集成である。これで見ると、南九州一帯に広く分布していることがわかる。また、型式別に見ても前平式土器の段階での宮崎県の様相がレモン形に関して捉えきれなかったが、加栗山式土器に関してのレモン形の分布は円筒形や角筒形と同様の分布である。この